

『賜物を与えた神の願い①』

'22/09/04

聖書箇所: エペソ人への手紙 4 章 11-12 節 (新約 p.377)

前回、私たちは「聖霊の賜物」ということについて学びました。イエス様を信じて救われたクリスチャンは、誰でも、I コリント 12 章で教えられているような、聖霊なる神様の『現れ』とも言えるべき、素晴らしい能力が与えられているのです。生まれつきの才能などとは違う…、イエス様を信じたがゆえの…、特別な力や能力を私たちは受けたのです。バプテスマを受けているかどうか、正式な教会員になっているかどうか、とは一切、関係ありません。関係があるのは、その人が本当に救われているかどうか…、間違いなく、神様のものとされているかどうか…、聖霊なる神様がその人の内に住んでくださっているかどうか、だけです。

命題: 私たちに聖霊の賜物を与えてくださった神の願いとは？

でもね、皆さん。…前回、私たちは、聖霊の賜物が与えられた目的をどのように学びました？⇒賜物が与えられた、その人の益のためでした？違いましたでしょ？その人の徳を高めるためでも無かったですよね？…賜物が与えられたのは、その人の必要を満たすためではなく…、むしろ、その周りの人の徳を高め…、その周囲におられる方々の必要を満たすためであったのです！

そういうことの具体的な説明を、パウロはここのみことばでしてくれています。…ですから、今日と来週は、私たちに聖霊の賜物を与えてくださった神様の願い、そのみこころについて、ご一緒に学んでいきたいと思えます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、エペソ 4:11-12 をお開きください。

I・指導者のもとに一致する！(11-12 節)

まず初めに、ちょっと言いにくいのですが…、教会に与えられたリーダーシップ、言い換えれば、指導者のもとに一致していく！ということですよ。そういうことを、神様は願い…、また、期待しておられるのです。

11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、

● 4種類 のリーダーシップ

まず、ここ 11 節には、『こうして…』という接続詞で始まっています。当然のことですが、これは、直前の話から続くための言葉です。じゃあ、すぐ前で何が話されていたかと言うと…、先週学んだように、イエス様が救われた一人ひとりに賜物を分け与えてくださった、ということでしたよね(…まあ、9-10 節は、賜物の話ではなくて、イエス様に関する説明になっているわけですが…)。

ですから、ここ 11 節では、もう1度話を戻して…、イエス様が個人個人のクリスチャンたちに分け与えてくださった賜物に関する話がなされているわけです。みことばは、はっきりと教えてくれています、「イエス様が、ある人たちを選び、そのために必要な賜物を与えられて…、そして、その人たちを使徒、また、預言者や伝道者、牧師、教師としてお立てになったのである」って…。だから、ここ 11 節でも、『キリストご自身が…』とあって、他の誰でもなくて…、「イエス様が」そういう人々を選ばれたのである！ということが強調されてあるのです。

では、ここで挙げられている指導者たちのことを見ていきましょう。①まずは使徒です。これは、元々、イエス様が特別に選ばれた、あの 12 人の弟子たちのことを指しています。その言葉(ἀπόστολος)の意味するところは、「遣わされた者、使者、メッセンジャー…」というようなイメージです。特に、その遣わしたご

主人様の權威と使命とを託されたような者に対して、この言葉は使われたそうです。…あの 12 人の内、イスカリオテのユダが裏切って、亡くなってしまったために、その代わりとして、マツヤという人物が選ばれました(使徒 1:15-26)。そして、その 12 人だけではなく…、聖書は明らかに、パウロも使徒であると教えてくれています。例えば、使徒 1:22 には、使徒として必要な条件として、こう説明されてあります…、「ヨハネのバプテスマから始めて、イエス様が天に上げられた日までの間、いつもイエス様たちと行動をともにし、イエスの復活の証人とならなければならない」って…。

つまり、彼ら(使徒たち)は、①第1に、イエス様から直接教えを受けた者たちであり…、②次に、イエス様の復活の証人とならなければならないとあることから、復活後のイエス様にお会いしていないといけなのです。じゃあ、パウロの場合、彼の回心は、確かにイエス様が昇天された後ですが、パウロはあの時、ダマスコに向かう途中で、イエス様の御声を聞いただけでなく、その後再び、イエス様とお会いし、イエス様から直接、教えを受けているので、全く問題はありません(使徒 22:14-21; I コリント 9:1; II コリント 12:1; ガラテヤ 1:12)。

しかし、今現在、「キリスト教会」と名の付く所で、「使徒」という地位に付く人物がいるなら…、その教会は、恐らく、聖書的ではないと考えるべきです。だって、今のこの時代に、①イエス様から、直接、教えられた者もいないはずですし、②復活後のイエス様を、直接、自分の目で目撃した人もいないはずからです。彼ら使徒たちに与えられた職務(=働き)は、イエス様のメッセージを教え、それを後世に残していくことでした…。そうすることによって、当時、彼らは、誕生したばかりの教会の基礎を据えていったのです。

その次は、②『預言者』です。この預言者というギリシア語の言葉(προφήτης)には、元々、「代弁者」というような意味があります。何となくですが…、現代の私たちが、この「預言者」という言葉を聞くと、「私たちには分からないような…、未来のことを予言し、言い当てる人」というようなイメージがあるかも知れませんが、聖書が教える預言者とは、必ずしも将来のことを言い当てるのではなく…、「神様の代弁者」であって…、神様から託されたお言葉を、神に代わって語る者のことをいうわけです。確かに、ある時には、先のことを言い当てるような…、未来に関する預言もありましたが、あくまでも、それは、神様が先のことをそのように教えてくださったにしか過ぎません。つまり、預言者とは、神様のみことばを受けて、それを語る者であったのです。

しかし、皆さん、考えてみてください？(聖書を持ち上げて)現代に、この聖書を通して語られている以外の、神様の啓示(=神様からの新しい教え、神様からのメッセージ)があるでしょうか？⇒無いですよ！どうしてでしょうか？…聖書の、ほとんど終わりの部分である、黙示録 22:18-19 のみことばが、こう教えるからです。『18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかします。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。19 また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。』⇒このように、神様からの啓示、神様からの新しいメッセージはもう終わったのです。この「聖書」という…、「神様のみことば」が完成したからです！…ですから、預言者という働きも、現代には在り得ません。ある意味において、聖書のメッセージを解き明かして説明するような…、そういう意味における預言なら、現代にも当然存在しますが、現代において…、神様が特定の人を選んで、神様からの…、新しいメッセージを語るような…、そのような預言者というような者は、今は存在しないのです。

その次には、③『伝道者』とあります。ギリシア語の言葉(εὐαγγελιστής)は、新約聖書中、わずか3回しか出てきません(使徒 21:8; エペソ 4:11; II テモテ 4:5)。…伝道者、つまりは、「福音を伝える者」という意味ですが…、この言葉と非常に近い言葉である、「福音」(εὐαγγέλιον)という言葉は、新約

聖書で76回も登場してきます。また、それと近い、「福音を宣べ伝える」(εὐαγγελίζω)という動詞は計54回も、新約聖書に出てきます。改めて言うまでもありませんが、「福音」であるとか、「伝道」といったことは、聖書の1番の中心メッセージなのです。

恐らく、伝道者として1番有名なのは…、代表的な人物はパウロでしょう。そして、ピリピもまた、伝道者と呼ばれています。そして、Ⅱテモテ4:5では、テモテも伝道者とされています。彼らは、福音のメッセージを世界中に広めていきました…。彼らは、そのために、どんどん新しい場所に出て行きました。この伝道者は、現代でも存在します。伝道者、あるいは、宣教師と言われたりする人たちがそうです。

そして最後に、④『**牧師、教師**』です。これらは、2種類の働き人ではありません。ここで言われている、牧師も教師も同じ働きなのです。…どうして、そういったことが言えるかと言いますと、実は、原語のギリシヤ語を見ても、この『**牧師、教師**』の単語の前には、冠詞が1つしか無いことから分かるのです。これは、これらの、『**牧師、教師**』が同じ働きであるということを表わしています。つまり、救われたクリスチャンたちを霊的な意味において世話すること…、つまり、「牧すること」であると同時に、教化(=教えること)によって、成長させていくことであるということ教えるために、パウロが使った表現であると思われる。

使徒や預言者たちが居なくなった後…、1個所に留まって、イエス様を信じ救われたクリスチャンたちをケアし、間違った教えなどから守り…、教え導いていくことが、『**牧師**』の働きなのです。

● **神様の 召し と、神の みこころ !**

先程も言いましたように、究極的な観点から見た時、牧師や伝道者たちをこのような働きに任命するのは、他の牧師たちではありません。また、教会や教団でもありません。イエス様なのです！だから、牧師や伝道者には、神様からの「召し」というものが必要になってくるわけです。…つまりは、神様が、自分をこのような働きに選んでくださったのだ、という強い確信が、そのような働き人には必要なのです。だって、そうじゃないと、もしある人が「私は、この教会の牧師となるべく召されている！」と言っても、他の人たちがそのことを納得しなかったら、どうにもならないでしょ？

間違いなく…、神様は、そういったこと(つまり、神様の特別なみこころ=例えば、フルタイムの献身をしなければ！アメリカへ留学しなさい！この土地へ引っ越しなさい！というようなこと)を、その人にだけ示されるのではなく、その人の周りの人たちにも示して下さるはずですよ。…そうして、その周りの人たちも、同じ確信に至るはずなのです。「この人は、神様から、この働きに召されている！」って…。

だから、例えば、ピリピ2:13のみことばは、**こう教えますよ**でしょ。『**神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。**』って…。皆さん、分かっていますか？⇒このみことばは、「あなた」ではなく、「あなたがた」と複数形で教えてくれていますでしょ？つまり、神様が、御自身のみこころを示して下さる時は、きっと、その人にだけみこころが示されるのではなく、その周りの人たちにも、恐らくは、教会のリーダーたちにも同じように示して下さるはずなのです。…そうじゃありません？

正直言って、今紹介したピリピ書のみことばは、一般論について教えられてるので、複数形で書かれていて当たり前ののですが、でも、皆さん…、例えば、神様があのモーセを召された時のことについて思い出してみてください。あの時、神様はモーセに対して、「わたしは、あなたをエジプトの王の所に遣わすから、わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ！」ということを命じられます。

しかし、その時、モーセは怖気づいて、こう申し上げます。出エジプト3:11、「私は一体何者なのでしょう？あのエジプト王、パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは？」って…。すると、神様は、「わたしは、あなたと共に居るから恐れるな！」ということをおっしゃってくださいます。

しかし、それでも、モーセは、13節、「**分かりました。私はイスラエル人のところに行きます。でも、もし、イスラエル人たちが、あなたを遣わした神様の名前は何か？と聞いたら、「私は、何と言えば良いでしょ**

う？」と尋ねます。すると、神様は、あの有名なお名前、『**わたしは、『わたしはある』という者である。**』(出エジプト3:14)ということをおっしゃって下さいました。要は、神様という御方は、何があっても無くとも存在される。「自存なる御方」だということです。そして、神様は、御自分の計画がどのようなものであるか、詳しくモーセに語って下さいます。

しかし、どうぞ、今度は4章をご覧ください。ここでもモーセは渋っています。出エジプト4:1、「でも、神様！いくら私が言っても、イスラエルの者たちは、私の言うことを信じないでしょう」と、モーセは言うわけです。すると、神様は、言い訳ばかりを言って、神様に従おうとしないモーセに対して、①杖が蛇になったり、②モーセの手をツアラアト、つまり、重い皮膚病にされたり、また、③ナイル川の水を血のように変えたりすることができる力をモーセに御与えになります。

しかし、それでも、モーセは、神様に従おうとはしませんでした。10節、『**モーセは【主】に申し上げた。**「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」…すると、神様は、こうおっしゃいます。11-12節、『**11 …だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、【主】ではないか。12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。**』…しかし、それでも、モーセは、頑なに、こう申し上げます。13節、『**ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。**』

すると、14節、さすがに、神様の怒りがモーセに向かって燃え上がります。…でも、その時、神様は、モーセに対して、こうおっしゃって下さるのです。『**あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼がよく話すことを知っている。今、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぼう。**』そう言って、神様は、口下手であったモーセに対して、饒舌であった兄のアロンを与えて下さりました。そして、その後、アロンは、約40年間、モーセの助け手として用いられていくわけです…。このように、神様は、主のみこころをなすために、必要な助け人を与えて下さるような御方なのです！

ねえ、皆さん、思いませんか？…つい最近学んだように、神様は、私たちクリスチャンに対して、「一致しなさい！他の者たちと調和しなさい！」ということをおっしゃられるわけですよ。…果たして、そんな神様が、何か、神のみこころを示されるような時、教会の中で、たった1人にだけ、みこころを示されるでしょうか？

実は、時々、一部のクリスチャンの方たちがおっしゃるのは、「でも、これは神様のみこころなんです！神様が、私に対して、こんな風にみこころを示して下さったんです！」ということですよ。…でも、それは本当でしょうか？果たして、天の神様が、「キリストをかいらして、教会は一致しなさい！他の者を重んじて、調和することを追い求めなさい！」とおっしゃって、それと同時に、神様が、一部の人たちにだけ、突飛な御計画を…、他の者たちが全く理解も納得もできないような、みこころを示されるものでしょうか？…もしも、そんなことが頻繁に起こったら、間違いなく、教会は一致どころか混乱&分裂していくでしょう…。そうじゃありません？

だから、私はこう確信しています。…一致を重んじられて、何より、現代のキリスト教会を「生けるキリストのからだ」として用いて下さっている神様は、特別なみこころを示されるに当たって、特定の誰かに対して「だけ」、そのみこころを示されるのではなく、間違いなく、その人の霊的な友人たち…、特に、その教会のリーダーたちに対しても、同じように、そのみこころを示して下さるはずですよ！って…。そうじゃないと、神様が用いようとして、せっかく、みこころを示された人たちが教会で孤立してしまっ、その人が、教会や多くの人たちからの支援を受けられなくなってしまいます…。ですから、皆さんには、どうか、「これが神様のみこころか？」と迷うようなことがあったら、まずは、霊的なクリスチャンの友人か、あるいは、神様が霊的なリーダーシップとして立てられた牧師に相談していただきたいと思ひます。

●リーダーシップの役目、責任 について

彼ら、教会のリーダーシップに与えられた役目…、その“責任”が、今日のみことばの 12 節以降で説明されています。『それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためである』って…。

つまり、一言で言うなら、聖徒たちを整えるということです。『聖徒たち』というのは、救われたクリスチャンたちのことです。…実は、ここで、『整えて』(καταρτισμός)と訳されてあるギリシヤ語の言葉ですが、この言葉は、元来は医者を使うような言葉で、「骨をつなぐ、完全にする、強くする…」というようなイメージの言葉なのです。…つまりは、様々な問題のあるクリスチャンたちのことを矯正していく(=間違った部分を正していく)、完全にしてい…、真つすぐ、強くしていくということを、このみことばは教えてくれているのです。

じゃあ一体、誰がそういったことをなして下さるのでしょうか？ このみことばは、どう教えてくれています？ ⇒牧師や教師…、ではありません。キリストだ！と言うのです。実は、このみことばは、日本語では少し分かりにくいかも知れませんが、この部分をギリシヤ語で書かれた原文で観察してみると、4:11-12 も、同じ1つの文章で、主語はたった1つ…、「キリストが」なのです。…つまり、イエス・キリストが私たち全員のことを成長させて下さるのです。そのために、神様は牧師を選んだ…、与えてくださったのだと、このみことばは教えているのです。

では実際、牧師たちは、どのようにして聖徒たちを整えていくべきなのでしょう？ ⇒まず第1に、祈りです。どうぞ、使徒 6:1-4 をご覧ください。『1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。 2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のこゝばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。 3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。 4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」』

⇒この頃、エルサレムの教会内では配給に関する問題が起こっていました。…と言いますのは、この時、多くの者たちが財産を共有して、一種の共同生活を行っていたからです。それで、その配給に関する問題を解決すべく、7人のメンバーが選ばれます。…その時、群れのリーダーたちであった12人の使徒たちが、自分たちに与えられた使命と責任について、こう説明するわけです。4 節、『私たちが、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします…』って…。このように、彼らは、祈りの大切さをよく知っていました。それと同様、牧師も祈りによって神のみこころを求め…、祈りによって聖徒たちを覚え…、そして、祈りによって神様の前に執り成しをしていくことが必要なのです。

それと、もう1つは、このみことばが教えていたように、『みことばの奉仕』、つまり、みことばを伝えていくということです。パウロも、エペソで牧会をしていたテモテに対して、こう勧めています。II テモテ 4:2-4、『2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。 3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、 4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。』って…。実に残念なことですが…、ますます、この世の中は、みことばから離れていく傾向にあります。みことばがそのように預言しているのです。

このことはかなり前にも言いましたが、皆さんはアメリカにある、「クリスタル・カスティードル教会」という教会のことをご存知でしょうか？ 非常に大きな教会で、一時期、教会の会員数は1万人以上、4000人が一緒に礼拝できるガラス張りの礼拝堂がとて有名でした。その教会の創設者(Robert H. Schuller)

は、車に乗ったままで礼拝できる、世界最初の「ドライブイン教会」を建てたのだそうです。しかし、もう1つ有名だったのは、その礼拝では、ほとんど聖書のみことばが語られないのだそうです。私が聞いた話では、1度の礼拝で数回、あるいは、1回ほどしか聖書の言葉を引用しないで、ずっと、みことば以外の話をするのだそうです。聴衆が心地良いメッセージを語る、というのが、その教会のモットーだったそうです。そのような教会ですから、罪についてはあまり語られません。しかし、その教会は、今はもう閉鎖されています。

その教会に限らず、ひょっとしたら、全世界的な傾向として、そういったような傾向が強くなってきているように、私の耳には入ってきています。…人々が純粋な聖書のみことばを聞きたくなくなる…、みことばを避けようとする…、自分に都合の良いことだけを言ってもらいたいから、それに合った教会を探して行くようになっていく…。しかし！ あなた方は、どんな時であっても、みことばを正しく教えなさい！ それこそが、牧師たちの本当の責任であると教えるのです。みことばによって…、教会員は養われていきます。いえ、教会員だけではありません。牧師も同様に、みことばによって養われていくのです。ですから、私たちクリスチャンは、みことばを第一にしていかなければなりません。私たち教会員がみことばを何より熱心に学び、牧師にも、そういったことを期待していくのです。

●聖徒たちの 責任 ！

そのようにして…、整えられた聖徒たちは、一体、どうなっていくのでしょうか？ ⇒今日のみことばは教えてくれています。『奉仕の働き』をしていくようになる、って…。そして、『キリストのからだを建て上げ』ていくのです。先週にも学んだことですが、イエス様を信じて救われたクリスチャンは皆、キリストの体の一部分なのです！しかし、その皆さんが、もし、何の奉仕も、何の働きもしなかったら、どうなると思います？ 現代の、キリストの体はストップしてしまいます！ そうですよ！ 現代のキリストの体は、ここにあって、そのキリストは、何も言わないし…、何も教えないし…、この世の中において、何の良い影響も与えることができないのです…。そんなことって、おかしいですよ！ …果たして、神様は、そのような教会を存続させて下さるのでしょうか？

だから！ 私たちクリスチャンは、せつかくイエス様と与えてくださった賜物を用いて働かないといけなしいし、そのようにイエス様を期待しておられるのです！ 奉仕の働きをするのは、牧師だけではありません。どうか、皆さん、よく、今日のみことばを観察してみてください。皆さんに奉仕の働きをさせて下さるのは、イエス様御自身なのです。牧師は、そのために用いられる器にしか過ぎません。教会というのは、救われた皆さんが聖書のみことばを学び…、賜物を用いて、活躍すべき場所なのです。

実に、そういったことのために、神様は、この教会に牧師というような、霊的なリーダーシップを与えてくださったのです。だって、教会全体の舵取りが、必要じゃないですか！ 確かに、私たち…、キリストの体である教会の頭は、イエス様です。しかし、そのイエス様のみことばを教え…、みこころを求め、そのために祈り、教会員たちを励ましていくようなことが必要であり、それをするのが牧師の務めです。ですから、教会員である皆さんには、その、与えられた牧師と一緒に、一致して…、神様に仕えていくことが必要なのです。

正直言って、今日のようなテーマは、私も話しにくいのですが、でもだからこそ、一気に言ってしまうと思います。どうぞ、I コリント 4:1-2 をご覧ください。『1 こういうわけで、私たちが、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。 2 この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。』とあります。ここで言われている、『私たちが』とは、すぐ後の4:6をご覧くださいと分かる通り、「パウロとアポロ」のことです。つまり、今日、私たちが学んでいる霊的なリーダーたちのことです。

先週にも話したように、当時のコリント教会には多くの問題がありました。その1つは、教会内に起こっていた分裂分派の問題です。しかも、コリントの教会は、自分たちの教会に与えられていたリーダーのことで分裂を起こしていたのです。しかし、その原因は、リーダーたち…、つまりは、パウロやアポロたちにあったのではありませんでした。原因は、その教会員たちの方にあったのです。

彼らが、勝手に…、パウロやアポロの名前を担ぎ上げて、勝手に、グループを作っては、お互いに反目し合っていたのです。だから、パウロは言うのです、「私もアポロも、キリストに仕えているしもべ(=同じ主人に仕えている奴隷同士)です。私たちは共に、神様からのメッセージを託されたリーダーなのです。あなた方の責任は、その…、教会のリーダーである私たちに従うことではありませんか！」って…。

どうぞ、今度は、ローマ 13:1-7 をご覧ください。『1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神による権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。2 したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにもそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。3 支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行いなさい。そうすれば、支配者からほめられます。4 それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。5 ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。6 同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。7 あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。』

⇒ここでも、みことばは教えます、すべての権威は、神様が御建てになったって…。確かに、このみことばは、すべての権威が正しいものであるということと断定しているわけではありません。ですから、私たちクリスチャンには、それが神様のみこころに反しない限り、与えられている権威を敬い、そのために祈り…、それに従っていく必要があるのです。…でも、皆さん、思いませんか？このローマ書のみことばは、当時、ローマ皇帝が多くのクリスチャンたちを迫害していた時代、しかも、そのローマに宛てて書かれた手紙であります。そんなローマ教会に対して、パウロは…、いえ、天の神様は、「神が与えた権威に従いなさい！」と教えられたのです。

ここにおられる皆さんも、日本の首相がノンクリスチャンだからって、日本の法律に背いたりしないでしょ？今の首相は支持できないからって、税金を納めることを止めたりしないでしょ。それは、与えられた権威が神様から与えられたものであるからです。今日、私たちが学んだように、教会の牧師たちも、神様によって…、イエス様の御働きによって立てられた器です。だから、私たちは、そのリーダーである、牧師や執事たちに従っていかないといけないし、そうでないと、教会の中に一致なんて、保っていけるはずがないじゃないですか！

<励ましの言葉>

どうか、最後に、1 テモテ 5:17-19 をご覧ください。『17 よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えるためにほねおっている長老は特にそうです。18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」、また「働き手が報酬を受けることは当然である」と言われているからです。19 長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。』

⇒ここでも、基本的には、「長老、つまり、教会に与えられたリーダーたちを尊敬しなさい、敬いなさい！」という原則が教えられています。また、そういったリーダーが、当然、報酬を受けるべきである、ということも教えられています。…しかし、特に注目していただきたいのは、最後の部分です。『長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。』とありますでしょ。…これは、言い換えれば、長老…、つまり、教会のリーダーに対する訴えは、2人か3人以上のものであるなら、耳を傾けなさい。つまり、それほど、長老たちは誤解を受けやすいから、慎重に対処しなさいということだと思われま。

当然のことですが…、長老や牧師であっても罪を犯すことはあります。だって、牧師であろうと…、聖徒であろうと…、皆同じように、「罪を赦された罪人」じゃないですか！しかし、教会員が、特定の罪を犯し…、それを悔い改めることがないならば、教会戒規…、つまり、ある種のペナルティが科せられるのと同じように、私たち牧師も、罪を犯し…、それを悔い改めようとしなければ、同様に裁かれなければならないのです。

だから、私たちリーダーには、特に、皆さんの祈りが必要です。サタンは非常に狡猾です。教会の中のどこを攻撃すれば、1番効果的なのか、サタンや悪霊たちはよく分かっているのです。

皆さんがよくご存知のように、私はそれほど信仰が成長した、立派な人間ではありません。時々、短気を起こして、腹を立てることだってあります…。未熟なせいで、それを認めるのが嫌で、人に頭を下げたり、すぐに自分の非を認めたりすることが苦手です。何かを判断することも…、普通の人以上に時間が掛かるようにも思います。…そんな私だからこそ、皆さんの協力が必要なのです。また、そのように未熟な私だからこそ…、皆さんの祈りが必要なのです。だって、神様の助け無しには何もすることができないからです。

どうぞ、皆さん。こんな私のために祈り…、また、教会を盛り立てていってください。それこそが、あなたに賜物を与えてくださった神様のみこころであり、また、願いのです。また、私が益々、八田西 CC の牧師として成長することができて…、リーダーにふさわしい成熟さを身に付けていくことができるようにも、お祈りください。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。